中山間地域の活性化に向けた支援

■　五名活性化協議会　■

（東讃農業改良普及センター　○北濱郁雄、矢木聖敏、間嶋悠人）

●対象の概要

東かがわ市五名地区は、市の南部に位置し、海抜は約250mで、南は徳島県と接する中山間地域である。昭和40年代前半までは、人口が1,000人を超えていたが、平成９年には500人を割り込み、現在では300人弱にまで減少している。高齢化率は55%を超え、市内でも高齢化が進んでいる地域である。

こうした中、人口減少や少子高齢化による過疎化に危機感を抱いていた住民によって、地域の活性化を図るため、平成13年には農産物や加工品を販売する直売所「ふるさとの家」をオープンさせたほか、平成17年には小学校の廃校を機に「五名活性化対策委員会」を立ち上げ、小学校で行われていた「山びこコンサート」等を引き継ぐなど、様々な取組が行われてきた。

●課題を取り上げた理由

「五名活性化対策委員会」には、連合自治会や老人会、女性部、「ふるさとの家」運営組織等が参加していたが、これをさらに発展させるため、平成25年に「五名活性化協議会（以下、「協議会」という）」として新たに再編された。現在では、市や香川大学の学生とも連携・協力しながら、地域の様々な課題に対する話し合いや、移住希望者への受入支援、「いのしし祭り」等イベントの運営等に取り組んでいる。

こうした中、地域の核となってきた直売所「ふるさとの家」が老朽化してきたことから、新たな施設を整備することとなり、令和元年７月のオープンに向けて、準備が進められていた。新施設には、直売所のほかジビエ料理を提供するカフェが備えられる計画で、ここでの販売や食材として利用する魅力ある農産物の充実等について検討を進めることとなった。

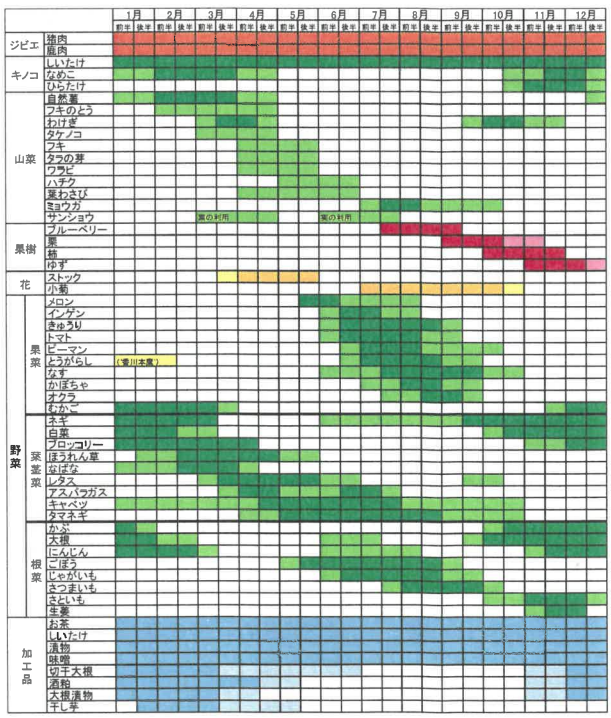
●普及活動の経過

1　定例会への参画

協議会で月１回開催されている定例会に普及センターも参画することとし、新施設で販売等をするための新規導入作物の提案や、様々な地域課題に対する対応について、協議会のメンバーとともに検討を行い、各種講習会・勉強会の開催や先進地視察の実施等を行った。

2　新規導入作物の検討

新規導入作物を提案するにあたり、まず、これまで地域で栽培されてきた農作物等が販売されている時期や量を把握するため、直売所「ふるさとの家」の過去１年間の販売実績のとりまとめを行った。さらに、新施設オープン時に来店者に対し五名地区の農産物・加工品を紹介するためのＰＲ資料として活用できるよう、「旬」のカレンダーとして見える化を図った。この結果を踏まえ、定例会等で新規導入作物について検討した結果、平成31年度から新たにトウガラシ「香川本鷹」の試験栽培に取り組むこととなった。



五名「旬」のカレンダー

3　ジビエ肉の活用促進

新施設のカフェで提供するメニューのヒン

トを得るため、平成30年度に協議会と共催で、高知県の「Nook's kitchen」西村直子氏を招き、ジビエ料理の講演・料理実習を実施した。

また、令和元年度には、ジビエ肉の解体・販売・活用の先進事例である愛媛県の「しまなみイノシシ活用隊」を訪問し、イノシシの解体方法や、ジビエ料理を提供しているカフェとラーメン店の取組について研修を行った。

ジビエ料理の実習

4　地域課題への対応

地域で課題となっていたサル等による鳥獣被害の防止に向けて勉強会や追い払いに利用する道具の作成を行ったほか、新施設周辺の景観改善に向けてヒガンバナの植え付けや、管理不十分なウメ園を再生するための管理講習会等を行った。

ウメのせん定講習会

●普及活動の成果

1　「香川本鷹」の試験栽培・商品化支援

五名地区は春先の気温が低いことから、その影響を調査するため、３月～５月に３回に分けて播種を行い、生育状況や収量の比較を行った。また、収穫した果実については、まず当センターの機器を用いて40℃と60℃で乾燥試験を行った後、一味を試作した。その結果を踏まえ、残った果実を協議会所有の機器を用いて、協議会メンバーが乾燥し、一味に加工して、新施設で販売している。一味の販売状況は良好で、乾燥した果実もカフェで食材として利用されており、こうした取組を通じて、協議会のメンバーは「香川本鷹」に手ごたえを感じており、新たな特産品としての定着が期待されている。

試験栽培の状況と一味の販売

2　ジビエ肉の活用促進

ジビエ料理の講演・料理実習では、新施設のオープンに向けて、調理の方法や、ミンチでの活用術、注文を受けて提供するまでの時間を短縮する工夫等を学んだ。また、先進地研修では、イノシシの解体方法や、皮を使用した小物(コースター、キーホルダー等)を見ることができ、視察終了後、早速実際の解体作業で視察した方法を試してみたり、小物作製についての検討が行われた。

3　地域課題への対応

鳥獣被害対策では、個人ではなく、集落ぐるみで対策に取り組むことの有効性が理解されてきており、今後の活動が期待される。また、ヒガンバナについては植え付け後の生育は良好で、協議会メンバーによって新たに柵が設置されるなど、自主的に管理が行われている。ウメ園については、樹形の改良に取り組んでおり、収穫した果実は、梅干として新施設で販売されている。

●今後の普及活動の課題

協議会のメンバーは地域をより良くしたい、活性化したいとの意識が高く、現在のリーダーに加え、次代を担うメンバーも育ってきている。こうした中、普及センターでは、今後も定例会に参画し、様々なニーズをくみ取りつつ、必要な提案を行いながら、継続的に支援していく必要がある。